

[14] B

次の文章は、『大鏡』『藤原基経』伝の一部である。これを読んで、後の問に答えなさい。

小松の帝の御母、この大臣の御母、はらからにおはします。さて、児こより小松の帝をば親しく見奉らせ給ひけるに、⁽¹⁾ことにふれ遺きやうじやく迹におはします。「あはれ君かな」と見奉らせ給ひけるが、良房の大臣の大饗にや、昔は親王たち、かならず大饗につかせ給ふことにて、⁽²⁾わたらせ給へるに、鵠きしの足は必ず大饗に盛るものにてはべるを、いかがしけむ、尊者の御前にとり落としてけり。陪膳はいぜんの、皇子みこの御前のをとりて、まどひて尊者の御前に⁽³⁾据ようるを、いかが思おもひ召しけむ、御前の大殿油を、⁽⁴⁾やをら⁽⁵⁾かい消たせ給ふ。この大臣は、その折は下臈げらふにて、座の末にて見奉らせ給ふに、⁽⁶⁾「いみじうもせさせ給ふかな」と、いよいよ見めで奉らせ給ひて、陽成院おりさせ給ふべき陣ちんのさだめ定にさぶらはせ給ふ。融とほるの大臣、左大臣にて⁽⁷⁾やむごとなくて、位につかせ給はむ御心ふかくて、「いかがは。近き皇胤くわういんをたづねば、融とほるもはべるは」と言ひ出で給へるを、この大臣こそ、「皇胤なれど姓給しやうはりて、ただ人にて仕へて、位につきたる例やある」と申し出で給へれ。⁽⁸⁾さもあることなれど、この大臣の定めによりて、小松の帝は位につかせ給へるなり。

〔出題校〕

中央大

〔重要語句〕

- はらから
- おはします
- 児
- 奉る
- 給ふ
- あはれ
- わたる
- はべり
- いかが
- まどふ
- 思し召す
- 大殿油
- やをら
- 下臈
- いみじ
- めづ
- おる
- さぶらふ
- やむごとなし
- たづぬ
- 給はる

注 小松の帝……光孝天皇。元慶八年（八八四）～仁和三年（八八七）在位。

この大臣……藤原基経のこと。太政大臣、寛平三年（八九二）没。五六歳。

還迹……人を驚かせるほど立派なこと。

良房の大臣……藤原良房、太政大臣。貞観一四年（八七二）没。六九歳。

大饗……大臣が、任官したときおよび、正月に恒例の行事として行う宴会。

尊者……大饗の客の内、筆頭の身分の者。

陣定……公卿が列席して行う会議。

融の大臣……源融。嵯峨天皇第十二皇子。臣籍に下り、源姓を賜った。

問一

傍線(1)「見奉らせ給ひける」、傍線(3)「据うる」、傍線(5)「かい消たせ給ふ」とは、それぞれ誰の動作か。もっとも適当と思う語句を本文中から抜きだして答えなさい。

(1)		(3)		(5)	
-----	--	-----	--	-----	--

問二

傍線(2)「わたらせ給へる」の敬語表現について、誰の誰に対する敬語か。もっとも適当と思うものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 小松の帝の陽成院に対する敬語
- B この大臣の陽成院に対する敬語
- C この大臣の小松の帝に対する敬語

○ただ人

○例

○さもあり

- D 陪膳の小松の帝に対する敬語
- E 語り手の小松の帝に対する敬語

--

問三 傍線(4)「やをら」、傍線(7)「やむごとなく」の解釈として、もつとも適當と思うものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

(4) 「やをら」				
A	B	C	D	E
急に	突然	そつと	わざと	ついでに

(7) 「やむごとなく」				
A	B	C	D	E
裕福である	有名である	人柄がよい	高貴である	権威がある

(4)	
(7)	

問四 傍線(6)「いみじうもせさせ給ふかな」とは、誰のどういう行為に対する評価か。その説明としてもつとも適當と思うものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 親王たちが、良房の大臣の大饗に、そろって参列したこと

-
- B 良房の大臣が、皇子の膳の鳩の足さえ、強引に自分の膳に盛り替えてしまったこと
 - C 良房の大臣が、親王たちの膳に盛るはずの鳩の足を、わざと盛りつけさせなかったこと
 - D 自分の膳に鳩の足が盛りつけてないので、小松の帝がっかりしたこと
 - E 小松の帝が、とっさに自分の前の大殿油を消して、陪膳の落ち度を庇^{かば}ったこと

問五

傍線(8)「さもあることなれど」の具体的な内容の説明として、もっとも適当と思うものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 小松の帝が、まだまだずっと位にお就きになっているはずだったのであるが
- B 融の大臣が、もしかすると位にお就きになったかもしれないのではあるが
- C 陽成院は、とうとう位にお就きにはなれなかったのであるが
- D 小松の帝が、当然位にお就きになるはずのことではあるが
- E 融の大臣でさえ、とうとう位にお就きにはなれなかったのであるが
- F 陽成院が、もしかすると位にお就きになったかもしれないのではあるが

